筑前國續風土記　卷之二十七目錄

古城古戰場　四

表糟屋郡　古城七所　古戰場四所

多々良濱　陣の腰　吉竹山

飯盛山古城　丸山古城　草葉古城

高鳥居古城　長者が原　上山田村古城

下山田村古城　名島城址

裏糟屋郡　古城四所　古戰場三所

御飯の山古城　杉山　和白

青柳町古城二所　立花山古城

團原　薦野臼嶽古城並小松岡砦

筑前國續風土記　卷之二十七目錄

貝原篤信　選定
貝原好古　編錄
竹田定直　校正

古城古戰場　四

表糟屋郡

○多々良濱

多々良村の西の遠干潟を多々良濱と云。糟屋川の下也。後宇多院弘安四年、蒙古襲來の防の爲め、此潟に亂杭を打て要害とす。其後も若異賊相續で來るべきかとて、此所に亂杭を構ふ。其時は此川下の湊に大船入し故なるべし。此時亂杭を打べき由の催促狀、今猶殘りて持たる者あり。建武三年二月、將軍足利尊氏、京都の軍に打負て筑紫に下り、筑前國多々良の濱に着れけるに、宗像大宮司是に屬して、將軍を我館に請じて甚尊敬す。尊氏の筑紫にて威勢出來しは、

ひとへに大宮司が早く屬せし故也。朝敵に與せし事不義と云つべし。此時菊池肥後守武重、同掃部助武俊は宮方に屬して京にあり。尊氏西國に赴し由を聞て、九國の内に入置じと、武俊追すがふて下りしが、海上にて兎角して違ひければ、豐前路を經て、肥後國大津山北の關に陣して、世間の體を聞居たる所に、筑後少貳太郎の、筑後の國府より筑前に越して、將軍の味方をするときく、千年川の渡にて、少貳頼尚が勢に打勝、其後少貳入道が楯籠たる、太宰府の有智山の城へ押寄て攻落しぬ。かゝりければ、菊池彌大勢に成て、尊氏を討んとて宗像の方へ赴く。將軍兄弟此由を聞、戰ひの道先んずるにしかずとて、宗像を打立て、糟屋郡香椎宮の側なる杉山に取上り、先陣は多々良濱に張出て、寄來る敵をまつ。菊池は五千餘人を率して、濱の西より進んで矢軍をしける。將軍の陣よりは矢の一筋をも射出さず、仁木、細川、高、上杉、吉良、石堂、畠山、扳連てかけ入、命を限り

に戰ふたり。菊池は鶴翼に圍んで西北より取籠め、先を遮り、左右に分れ、變化機に應じて、かけ立〳〵戰ふ程に、仁木、細川、吉良、石堂、追立られぬと見えければ、先手に力を付んため、將軍兄弟杉山を打下し、眞洲崎の山にかけ出られし所に、菊池が後陣に在ける下松浦、上松浦、畑、草野、神崎の者共、俄に心を變じ、裏切をして責ければ、菊池前後の敵を防かね、多々良濱の遠干潟を二十餘町引退き、暫く人馬の息を休め、又寄んとしたりけるに、菊池に從ひたる近國の勢落失て、手勢許に成ければ、一先肥後國へ引返し、かさねてこそ勢を催さめとて、筑後路によりて引返す。尊氏多々良の合戰に打勝、仁木義長一色入道を大將として、菊池退治のために肥後國へ指遣しける。菊池が宗と賴みたる阿蘇大宮司惟直は、多々良濱の合戰に深手負たりけるが、肥後國小杵山にて自害す。秋月備前守は太宰府まで落たりしを、敵大勢にて取圍みければ、終に叶はず討れにけ

り。城赤星も深手を負ぬ。菊池彌無勢に成ければ、一支へも支へずして、深山の奥に引籠りける。仁木義長、一色入道は、同國八坂の城を責て、内川彦三郎を追落し、筑前國に歸陣す。是より後、九國二島悉く將軍に隨ひけり。此合戰の事は、太平記十六卷に詳也。永祿十二年五月十八日、大友家と毛利家と此濱にて合戰あり。其軍の仔細を尋るに、毛利元就、筑前國寶滿の城主高橋鑑種を救んとて、安藝周防長門石見の軍勢を引率し、豐前國に渡り、筑前國に打入らる。豐前筑前の内には、大友幕下の國士多しといへ共、中國の大勢を聞見して、一戰にも及ず城を出て、筑後路指て引退く。立花の城に鶴原掃部助、田北民部丞、臼杵進士兵衛城代として有けるが、あづかひを入て、立花の城を請取。三人の城代は豐後に送り歸されける。かゝりしかば、毛利家の將吉川元春、小早川隆景は、立花の城に本陣をすえ、先手の諸勢は、香椎多々良の邊迄ひたと續たり。惣大將元就は、豐前國小倉に滯留して、

筑前國には入られず。又始より筑前在陣の、大友家の三將、戸次丹後守鑑連、臼杵越中守鑑速、吉弘左近大夫鑑理は、博多に陣取、足輕を多々良濱に出し、迫合あり。同十三日、毛利の先手佐波、熊谷、三戸、桂、末永、天野軍勢を率し、立花城を下り、博多松原に備を立、足輕をかけ、津内を放火す。大友勢も三方より勢を進めて、一日に四度の戰ひあり。始の程は、筑紫勢勝に乘、中國勢負色に見えける所に、平賀源四郎、末永源七郎、石黒種五郎、宗近刑部左衞門、宍戸四郎左衞門、桂内記、三浦平太夫、大多和備後守、岡部六郎左衞門、香川監物、佐々木源三郎、光永藤左衞門、内藤掃部助を始として、毛利家に名を得し一人當千の士共、松原より馳來て、馬の足を一面に立並べ、馬上に鎗を持、まつしぐらに突懸りける間、筑紫勢こらへずして、三方に分つてさつと引。中にも桂内記は、十六歳の若武者成しが、只一騎味方をかけ離れ、にぐる敵を追て、北へ向ふて

馳けるを、大友勢の中より七八騎引返し、終に桂を打取けり。斯て日も暮しかば、中國勢博多を引て、香椎の山に引上りける。同月十八日、吉川駿河守元春、小早川左衞門佐隆景、立花山を下る。兼てより香椎在陣の佐波、熊谷等が勢を合て四萬餘人、多々良濱の東に、合戰を志して備たり。大友の三將是を見て、敵合戰を志と見えたり。敵を待て戰はんよりは、此方より進んで勝負を決せんとて、三萬七千の勢を二手に分け、豐後勢一萬餘人有しを、戸次鑑連、臼杵鑑速、吉弘鑑理各五千餘人づゝ、三手にわかちて、先手に進む。自餘の勢は豐前、筑前、筑後の國士二十六人、部合其勢二萬二千餘人は脇備也。各一手切に懸て、手柄次第の勝負にせよ。九國、中國分目の合戰なれば、臆病の名を恥よと戒めて、既に合戰始りけり。敵味方八九萬の鬨、鐵炮の音、天地をひゞかせり。兩軍入亂て戰ふ程に、多々良濱の東西には、双方の死人算を亂せるがごとし。中國方には

吉川、小早川、天下に譽を取たる名將也。大友方にも戸次、臼杵、吉弘、九國に名を得し人々なれば、牛角（ごかく）の戰にて、いつ勝負有べしとも見えざりける所に、戸次丹後守鑑連は逞兵五千餘人を引卒し、案内者を先立て、隆景の左備へ長尾と云所の陣に押懸り、鐵炮八百挺一度に放ちかけたり。又こみかへて放つ鐵炮に、敵色めき漂ふ所を、鑑連眞先に馬を乘出し、敵の中へかけ入、面もふらず縱横に突て廻りける。五千餘人の兵共鎗先を調へて突懸る。中國方には、清水、渡邊、兒玉、内藤、波多野、福原四千餘人にて控たりしが、相懸に懸て、爰を先途と戰ひけるに、鑑連が勢に突立られ、三町許引退く。大友方是に力を得、ときを作りて、諸手總懸りに進みける。すはや中國勢負色に成ぬと見る所に、隆景大音聲を揚て、清水、渡部等を助けよ、兒玉、波多野を討すな者共と、下知せられければ、飯田、榎本、入江、山内、益田、梨羽、和知、東條、手島、草刈等八千餘人、

濱表を筋違に懸て、火を散してぞ戰ひける。數刻の強戰なれば、雙方疲て、毛利勢は立花山へ引上り、大友方は、本の博多の陣に引歸る。戸次鑑連が手にも、十時下野守、由布掃部助を初として、戰死の士四十餘人、毛利方にも末永源七郎、赤川九郎左衛門、須子主水允、粟屋三郎左衛門を始として、宗徒の兵五十四人打死す。就中末永源七郎は、群に越え、比類なき力戰しけるが、主從十三人皆一所にて戰死せり。其子孫の家に、元就の證文も猶持傳へたり。凡此所兩度まで大合戰有しかば、近世まで白骨多く殘りしと云。

○陣　腰

多々良大橋の東北なる山上に、陣の腰と云所有。是足利尊氏香椎より出て、此所にしばらく陣を取、多多良濱において、菊池と戰はれしと云傳へたり。

○吉　竹　山

井野村にあり。其山上に首塚とて小塚多し。此所立

花氏と薩摩勢と、合戰せし所と云。

○飯盛山古城

金井手村の上に有。城址あり。古き屋敷あとも有。其下にも段々に宅の跡有。飯盛山の少北に、ひきく平なる山有。陣がたをと云。

○丸山古城

大隈村の上に在。平地二段許あり。周に隍あり。杉權頭連並が墓所有。石を多く積て墳とす。此城連並が城成しにや。川より南にある山を燒地と云。丸山と相むかへり、此兩山の間より東を迫門河内と云。

○草葉古城

若杉と篠栗村との間の南山に有。是杉權頭連並が出城なりと云。

○高烏居古城

若杉山の西、植木村の上にあり。上に城址二段有。高くして甚嶮し。然れ共、若杉山の半よりひきし。城址よりすぐに若杉山へ上る。此城は、周防國大内氏

の家臣、杉豐後守興行取立て居住し、其後鞍手郡龍德の城より、杉彈正忠重、並同權頭連並相續て懸持にしたりけるが、或時秋月より此城を攻取。天正十四年七月廿七日、島津兵庫頭義弘、御笠郡岩屋の城を攻落、高橋紹運自害せり。同廿八日寶滿城を攻破り、岩屋寶滿をば秋月種實に渡し、其後立花城に手遣し、降參すべき由云遣しけれ共、立花左近將監統虎返答には、關白殿より御朱印を賜はり、御家人に罷成候。殊實父紹運事、殿下の爲に戰死せり。當城にて紹運報仇の爲一戰仕候て、其後申談可との儀也。敵も岩屋に於て、宗徒の勇士多く討せ、手負死人多ければ、立花を攻ん事思ひもよらず。斯る所に、八代の本陣島津義久より申來りけるは、其地を早々引取べし。秀吉先手の大軍驕て下る由聞ゆ。就夫義久も先歸國する由、告げ越れければ、八月廿四日、薩摩勢皆宰府の陣を引退く時に、此高鳥居の城は、近年空城にて有しを、秋月方より拵へて、立花押への爲、筑後國

の住人星野中務大輔吉實、舍弟民部少輔吉兼を籠置ける。斯て島津は引退きぬ。翌廿五日の朝、立花勢打て出、此高鳥居の城に打向ふ。立花と高鳥居の間、行程纔に六十餘町なれば、巳の刻許に押寄、関を作る。城中は持口廣くて無勢也。其上俄に拵へたる城なれば、塀櫓堅固ならず。然れども東北は易く登難き切所也。西は大手、南は二の丸にて、一町許地底く、竹木所々に生たり。寄手西南より攻上れば、城の内より弓鐵砲を以て防ぎけり。されば共寄手事ともせず、塀下に付けるが、丹半太夫、沓懸掃部、臼杵新七、宇美喜四郎鐵砲に當りて死せり。十時傳左衛門、立花次郎兵衛、同三太夫、池邊龍右衛門、十時但馬、内田因幡、由布大炊助等續て攻入、軈て塀を打破、城中に火を放ければ、星野勢共周章騒ぐ所を、立花勢爰に追詰、かしこに追懸、射伏切伏する程に、助かる者はなかりけり。城の大將星野中務大輔吉實は、櫓に上り味方を下知して居たる所を、立花治郎兵衛

走り寄、一槍突けるが、鎧の上にてとほらず。二の槍をつかぬ間に、吉實奥の丸に引入所を、續て十時傳右衞門槍付て首を取、此外星野民部少輔を始、城中の者共一人も殘らず討取けり。かく片時が内に此城を乘崩し、城主を始、悉く首を刎し事、比類なき高名也。さればこそ、九月十日、秀吉公より黑田孝高に賜る御書に、此軍功をほめて、立花統虎の事を、九州の一物とは稱し給ひけれ。

○長者が原

下中原村の境内にあり。長者原の内、長者の鞍懸松とて、九圍許なる大木有しが、延寶の末倒れて、今はなし。其上に小高き所有。此邊の圍の字を御所の陣と云。貞治元年九月廿三日に、探題斯波左京大夫が子松王丸とて、十一歳に成けるを大將にて、太宰少貳舍弟筑後次郎、同新左衞門、宗像大宮司、松浦一黨都合七千餘人にて、此所に馳向ひ、道を遮て菊池が寄來るを待かけたり。同廿七日、菊池彦次郎五

千餘人を二手とし、此長者原に押寄て戰ひけるに、菊池方岩野、鹿子木將監、下田帶刀以下、宗徒の勇士三百餘人討れ、彦次郎も三箇所まで疵を蒙りて、宮方の軍勢已に二十餘町引退く。すはや打負ぬと見えける所に、城越前守五百餘人を引率して、入替て戰ひけるに、少貳筑後次郎、同新左衞門等二人共に一所にて討れぬ。其外松浦、宗像、大宮司が一族、若黨四百餘人討れぬ。探題、少貳二度目の軍に打負て、皆散々に成にけり。此軍の事、太平記三十六卷に出たり。此時松王丸が陣せし所を、御所の陣と云なり。又長者原の邊古墳多し。皆石棺にて石を蓋にせり。

○上山田村古城

村より西の山上にあり。城主詳ならず。

○下山田村古城

是も村より西の山上にあり。立花城を攻し時の向城也と云。是は中國勢立花に籠し時、大友家より攻し時の事なるべし。

○名島城址

此城は、立花但馬守鑑載始て築て、立花の端城とせり。天正十五年、秀吉公西征し、其年の夏、筑前國及筑後國の内、三井、三原二郡、肥前の内、基肄、養父二郡を小早川隆景に賜はり、九國の押へとし給ふ。若九州に變あらば、毛利家より中國勢を指遣はし、隆景を助けて、亂を靜めらるべきとの心づかひとぞ聞えし。隆景の城地をば名島に築べしとて、秀吉公自經營有て、要害を定らる。同十六年二月廿五日、城營作の事始あり。亂世の内なれば、營作をいそがる。然る故、城大なれど、其功速に成る。隆景は七年此國を領し、官中納言に任ぜらる。秀吉公北政所の兄、木下肥後守の季子金吾秀秋を養子として、國をゆづり、備後國三原の城に退きて、隱居せられ、慶長二年六十三歳にて卒せらる。秀秋相續て國を領せらる。是を後の筑前中納言と號す。天正十五年より、慶長五年まで十三年が間、父子相續て當城の主

たり。（其内一年、秀秋越前に移住せられし事有。第一卷に詳也。）然るに慶長五年、長政公に此國を賜はり、秀秋は備前美作に改め封せらる。（此時により請取るまで一本によりて誤す）此時長政公より黒田惣右衛門、小河喜助を先手に遣し、此城を請取らる。長政公其年の冬入國有て、此城に住給ふ。然るに此城三方に海あり、一方には山つづき、城下の境内せばくして、久しく大國を守るの地にあらずとて、其父如水と相議し、翌年より福岡に城を築かる。是に依て、名島の城の石壁櫓（やぐら）等悉く崩して福岡に運漕せり。名島の城の北なるを本丸とし、其南につゞきたるを二の丸とす。是は本丸より廣し。今は畠と成て其字（あざな）井上と云。是隆景の家臣井上伯耆が居たりし故也。其南にほり切あり。其址を今は宗勝と云。是家臣浦兵部宗勝が居たりし故也。城址の前なる圃（はたけ）は、皆士大夫の宅址也。商人の居たりし町は、南のひきゝ山の下に少有しとかや。此町を福岡に移されし所名島町也。松崎村に近き東の山上に、隆景の家臣松原下野が宅の址有。名島より箱崎

への通路、潮満てば水を渡り行事成難しとて、大橋を渡されける。其橋の長百間餘有しと云。今渡し口と云所、則橋際の跡也。むかひの地藏松原のみぎはにも、橋の有し所に石あり。

裏糟屋郡

○御飯の山古城

香椎宮の東北、御飯の水の上にある山也。大友の臣一萬田彈正が籠りし所と云。一說、宗像記追考には、立花の端城なりと云。是はさも有べし。但時によりて、城主替るべければ、一概にはきはめがたし。

○杉山

香椎宮の西南にありて其間近し。尊氏の多々良濱合戰の前の陣所成しとかや。杉山の後の方を皆打と云。是神功皇后熊襲を皆打平らげ給ふといふ名なり。

○和白

上下兩村にわかる。永祿十年九月八日、宗像大宮司氏貞、許斐左馬大夫氏備が勢此所に打出て、近邊を

放火す。立花の城代怒留湯入道馳向て責戰ふ。双方討死の士雜兵共に二百餘人あり。黄昏に及で、宗像許斐岳を指て引取ければ、怒留湯は其夜和白に陣取て、翌九日立花但馬守鑑載と同道し、立花も心もとなしとて歸陣しける。此時怒留湯が宿陣せし所なるにや。和白の山上に陣所の址殘れり。

○青柳町古城二所

青柳町の東、谷山村との境に古城あり。新城と云、高き城山也。立花氏家臣の居たりし所と云、又其西に城址あるを四方城と云。城主詳ならず。又青柳町の東南十二三町に良泉寺村有。青柳の枝村也。觀音地藏堂あり。いかなる寺なりしにや詳ならず。

○立花山古城

昔は二神山と云。いつの比よりか立花山と號せり。此山七峯有。南にあるを本城と云、最高し。又井樓山と云平なる所一段許有。本城の北に水の手あり。山の腰より谷水いづ。其西にあるを松尾（まつのを）と云。其上の平なる所五六畝あり。松の尾

の西なるを白岳と云。本城の西にあり。其上平なる所一段許有。松尾の南なる、ひきゝ山を大つぶらと云。大つぶらの南なる、いとひきゝ山を小つぶらと云。本城の東にある小山を大一足と云。又其東にある小なるを小一足と云。すべて七峯也。近古豐前筑前は、もと大内家に屬せり。義隆陶全姜がために弑せられ、陶は毛利元就に亡されし後は、大友家九州の探題職を賜りたればとて、悉く大友に隨ひぬ。大内家滅亡の後は、筑前國いよ〳〵大友領となる。此時城主立花但馬守鑑載は、大友左近將監能直より十三代の後胤なり。其先祖大友貞載此城を創築きしより、鑑載まで七世の居城也。宗麟の父義鑑より鑑の字を賜る。立花の西樓岳には立花鑑載住す。大友家より加勢のため、怒留湯長門入道融泉來りて、同所白嶽に在城せり。永祿十年九月、宗像氏貞、許斐左馬大夫氏備、大友に叛き毛利家に心をよせ、此城を攻んとて、同月五日に發向す。然るに立花鑑載、怒留湯融泉、城を

出て團原（だんの）にて防戰あり。（團の原の所に見えたり。）同年十月二十二日、立花鑑載は怒留湯入道融泉、國士米多比大學助、薦野三河入道淨圓を相語らひ、宗像郡西郷庄に打出て燒働く。其由來を尋るに、此所に川津、深川、難波、溫科（ぬるしな）、井原、石津など云て、昔より相續て住ける郡士七八人あり。天文の比までは、大内家の旗下なりしか共、義隆討れ、程なく陶も亡び、元就中國を伐取給ひければ、彼等も元就に志を通じてありけるを、立花鑑載其地を奪んとて、頃年西郷に動く事度々なり。川津、深川も勇士にて有ければ、鑑載を防て年を經る。然に今年國士多く謀叛して、此彼騷動する折柄なれば、小身の者共獨立成難して、川津、深川を先とし、大略宗像氏に屬す。（是は宗像も毛利家に屬せし故也。）氏貞不レ斜悅び、與力の士三十六騎、川津、深川、河野、石津等に附て、其儘西郷に居らしめ、糟屋口の押へとす。立花鑑載是を聞、此方にこそ降を乞べきに、宗像の手に付こそ安からね。川津深川が首取て、軍神に祭んと

て、同月二十二日、西郷に動き出る。氏貞是を聞 兼て心を通ぜし杉權頭連並、麻生上總助元重を語らひ、西郷に打出て、川津、深川已下を救んとす。爰に多賀美作守隆忠は、立花鑑載に一味し、力を合せんため立花境内に發向す。宗像が士共此由を聞き、道をとりて、爰彼にかくれふし、敵疇町(あぜまち)河原に押來る時、前後より喊と起り、鬨を揚げて責戰へば、隆忠一戰に討負て自害す。宗像氏貞が勢は、夫より直に西郷に馳行て、立花勢と對陣す。其比高橋鑑種は、秋月種實が城强うして、豐後勢筑後表へ引退きぬと、國中沙汰する折節なれば、立花怒留湯が兵力を落し、やゝもすれば軍に利なくして、終に同二十八日、立花怒留湯已下敗北して、己が城々に歸りけり。扨こそ西郷三百町の地において、立花兩城代より手を指事あたはず。立花但馬守鑑載は、元來大友氏の親族にて、數代臣屬せしが、大友宗麟の惡逆無道なるを恨て、大友に叛逆し、毛利元就の威勢を傳聞、永祿十一年の春、藝

州に使をたて、立花は九國にて一二の要害にて候、早々勢を指越されなば、鑑載御先手を仕、高橋鑑種に力を副(そへ)、九國を御手に入候はんと云遣す。又高橋三河守鑑種も、家臣衞藤尾張守を藝州に遣し、加勢を乞事頻なれば、元就周防長門兩國の勢八千餘人を、筑前國立花へ指越さんとて、既に兵船の纜(ともづな)を解く。鑑載謀反心中にありて、未知る人なかりければ、大友味方の國士、米多比、薦野、怒留湯、常に鑑載と會合して、軍の評定をするに、或時米多比大學助、薦野淨圓を鑑載呼迎ふ。兩人何の心もなく、鑑載が居城西樓岳に來るを、兵を隱し置、三人ながら打果す。即時に怒留湯長門入道が居城白岳に押よする。融泉思ひもかけぬ事なれば、戰ひ負て漸遁れ出、筑後國に馳行、大友氏族の人々に始終を語る。こはそもいかに、鑑載は大友骨肉なりしに、思ひ懸ぬ事哉と、驚きける所に、同四月六日、中國勢夥しく渡海して、立花に着陣すと聞きければ、豐後勢戸次丹後守鑑連、

臼杵越中守鑑速、吉弘左近大夫鑑理、筑前國に發向し、同月二十四日より、立花の城を責る。城内には立花但馬守鑑載、同國の住人安武民部丞、並原田越前守隆種が五男原田下總守親種も、此間中國に越て有しが、鑑載謀反に付、中國より加勢に越されければ、清水左近と同船して、立花まで來りしが、援兵として楯籠る。中國の大將は清水左近將監、高橋鑑種が家臣衞藤尾張守、彼是一萬餘人、身命を捨て防ぐ。寄手三萬餘人爰を先途と攻ければ、敵味方の死人岸谷も埋む許にぞ見えにける。こゝに鑑載が家人に野田右衞門太夫と云者あり。立花家重恩の者にて、鑑載殊更頼み思ひけるが、寄手の將戸次鑑連に頼まれ、利欲にふけり恥辱をかへりみず、軍半に鑑連が勢を城中に引入れ、忽反逆しければ、防ぐ所の城兵度を失ひ、散々に落行。安武民部丞は奈田主水正が手に生捕れけり。原田、清水、衞藤も、人數若干討せて、名島の小城をさして引入にけり。日既に夕陽に及び、

臼杵吉弘も戸次鑑連と一に成て、多勢城中にこみ入ければ、鑑載主從十餘人、城を紛れ出、ふるこの城に落下り、暫く息をつき、夜明なば、原田清水已下と一つに成て一方を討破り、中國に渡り、重て本意を達せんと、密かに敗軍の士を集めけれ共、思ふやうに兵も集らず、此城にて功を立ん事叶難し。敵の知らぬ先に、湊の方へ落んとて、ふるこの城を出て、東をさして馳せ行所に、野田右衞門大夫いかゞして聞けん、鑑連にかくと告たりければ、鑑連取物も取あへず、八千餘人の勢にて跡を慕て追かけ、先鯨波をぞ揚たりける。鑑載是を見て憖(なまじひ)に敵と懸合、生捕られては口惜かるべしとて、道よりかさに打上り、松の一村ある山中におり居、鑑載大音聲を揚て、野田右衞門に出拔れ、手脆く城を落されけるこそ口惜けれと、云も果さず、腹十文字に掻切、返す刀にて吭(のどぶえ)さし通し、立すくんでぞ死にける。十四人の士共、後れじと腹を切る。其中に舍人一人ありけるを、士共汝は下臈

なれば敵も落すべし。落て命を全うせよと云ければ、彼舍人涙をはら〳〵と流し、一言の芳志をも忘れざるは人の常也。既に我君の祿を食んで年久し。何の面目有て、命生て二度人に仕んやとて、みづから首を掻落してぞ死にける。鑑載が首をば、宗麟に見せ申さんとて、田原太郎次郎を差添て、豐後に送る。さて立花の城には、津留原掃部助、臼杵進士兵衞、田北民部丞を籠置、戸次鑑連は野田に陣を取り、臼杵鑑速は小竹、吉弘鑑理は青柳に陣を張て、秋月、高橋に與力する國士を討んとす。然るに同年の秋八月、高橋三河守が家老衞藤尾張守は、去夏立花にて同死同生の誓をせしか共、鑑載を捨て遁たりと皆人譏ると聞、無念骨髓にとほり、原田親種清水左近將監と相議し、今一度無二の合戰し、立花を責落し、先日の恥をすゝがんと、敗軍の士卒をあつめ、三將一手に結び、同二日寅の刻立花表へ打出る。立花の城代、臼杵、田北、津留原が方より、敵出張するよし、急を

告ければ、野田より戸次鑑連、小竹より臼杵鑑速、青柳より吉弘鑑理、三方より即時に懸合て、散々に相戰ふ。臼杵吉弘の兩將は、敵を立花山に登せては叶ふまじとて、城と敵との間を取切て、城に人數を繰入て、敵を外樣にして戰けり。原田、衞藤・清水が勢、戸次鑑連が陣に押懸り、無二無三に懸散んとす。鑑連が大勢、敵を眞中に取籠てあまさじと戰ふたり。原田、清水、衞藤は、後にも敵関を作り追懸る。今は逃れぬ所也とて、味方を勵まし、討死爰にありと、命をおしまずおめいてかゝる。鑑連の一番備小野彈之助、颯と引て讓れば、二番に由布美作入り替て、三めぐり四めぐり散々責合、ひらいて三陣にゆづる。後藤隼人佐くつばみをそろへて、競懸りて相戰ふ。此手も戰疲て開きのけば、四番堀安藝守、五番安東周防守、六番に高橋大膳亮入替攻戰へば、衞藤尾張守も討死し、中國勢も原田高橋勢も、殘りすくなに討なされけり。清水左近は北をさして懸ぬけ、新宮

の湊より主從十餘人、小舟に打乘て長門地に押渡る。原田下總守親種は、とてものがれぬ所ぞと思ひければ、落んとする氣色なし。馬も射殺され歩立になり、冑も打落されて大童になり、をめきさけんで戰けり。郎等もはや殘すくなに討なされて、親種も討れつべう見えける間、萩原五郎兵衛、染川十郎一先落給ひて、重て本意をとげ給へと、放れ馬のありけるを、引寄て打乘せ、一方を打破て西をさして引退ける。永祿十二年四月中旬、毛利元就は、筑前國寶滿の高橋鑑種を救んとて、安藝、周防、長門、石見の勢四萬餘人を引卒し、豐前國に渡り、したがはざる者共を攻亡し、同月廿四日、其子吉川元春、小早川隆景を大將として、豐前國より筑前國に打入る。豐前筑前には、大友旗下の國士、又は豐後の士大將、所々の城に在といへ共、中國の大勢を見聞して、一戰にも及ばず、城を明て筑後路さして引退く。立花の城には、津留原、田北、臼杵の三將敵來ると見てければ、山下に

人數を下し、海道を指塞ぎ、一さゝへせんとす。毛利の先陣入江、宍戸、兒玉、市川、佐世、福原等一萬餘人鬨を作りかけ、喚き叫んで攻戰ひける間、叶はずして、悉く城中へ引上りけり。斯て中國勢立花の城下を、尺寸の地も餘さず取卷たり。されば共城中能持こたへて落ず。或時城中より、五月雨にさこそ物具も黴候はんと思ひやり、笑止に候と書て、一首の狂歌を矢文に書て、寄手にぞ送りける。中國陣より返しに、やがて落城の歎き、思やられていたはしく候と書て、返歌をつかはす。其歌は皆鄙拙なれば爰に記さず。其後城中水に渴し、久しく雨もふらざれば、人馬共に難儀に及ぶ。中國勢には、金掘多くあつめて、やぐらをあまた掘崩し、水の手をも堀切し故也鶴原、田北下知して、白米に灰を入て、山城の高所にて馬をあまた引出し、湯洗のまねなどして見せける。是は別所の丸に水ありと、敵に見せんための謀也。されば共水なければ飯をかしぐ事ならず、後には米を袋

に入、岩根の濕氣ある所にうづみ置、取あげいりて食す。爰かしこを掘ても、高き山城なれば水なし。草木におく朝露をなめなどしける。かゝりければ、勇力もつきて、敵をふせぐべき樣なし。敵に居ながら首を取れんより、少も力の有内に、敵にあひて死ん事こそ、武士の本意なれと云輩もあり。乍去、宗麟へ此由を申入んとて、吉田源六兵衞と云忍びの上手を使として、此由申入ければ、宗麟聞て思ふ仔細有、早く降參可致由被命しかば、彌六兵衞又敵中を忍び城中へ歸り、其よしを告。兩人の城代是を聞て其意に任せ、吉川、小早川へ降參す。元就の命にて浦兵部、桂能登兩人を添へ、掃部民部以下降參の兵悉く宗麟の陣へ送り屆らる。同年の十月十四日、豐前國小倉より、元就使を筑前に遣し、立花の城には押へを置、其外は引取べきよし下知せらる。是は大友より中國の留守をうかゞひ、大内の一家に大内太郎左衞門輝弘、其子四郎左衞門武弘と云者ありしを大將と

して、三千餘人の軍勢を差そへ遣しければ、山口に至て亂妨す。是のみならず、故尼子晴久が臣山中鹿之助と云者兵を起し、尼子の氏族伊豫守、出雲國に打入よし、注進有ける故、本國の亂をしづめんためとぞ聞えし。扨誰が此城に殘り留りて守るべきやと、元春、隆景詮議せられけれ共、誰有て留るべきと云者なし。其時兩人云ひけるは、詮議のみにて埒あかず。此方より指圖すべし。頭分と云一門の端なれば、桂左衞門尉殘り候て可然と有ければ、是非に及ばず領掌す。其時末座より大勢の諸士を押わけ、槍のうの首に鷹の鈴を付たる武士一人、進み出で申けるは、拙者は坂田新五左衞門と申者にて候、人の數にては候はねども、今度兩將御退候跡・殘の御人數すくなく相見え候間、拙者殘り御用立可申由申ける。兩川是を聞、げにも坂田殿は數度の譽有し人にて候間、さこそ可有と感じける。（此時代中國士は、一日の内に七度鎗を合すれば、槍に鈴を付けると也。）其より、隆景の家賴浦兵部宗勝、是も跡殘仕、御用

に立可申由云ける。則此三人を頭分として人數を殘し置、翌十五日、元春隆景以下、立花山を靜に引下る。大友勢は宵より此由を聞、秋山の邊まで押詰て陣取、敵の退口を討んとて兵粮をかけ、既に合戰始りける。去程に、毛利勢は引取、大友方はくひ留る。其折節天かき曇り、風はげしく霙(みぞれ)降て士卒皆凍えたれば、我先にとぞ引ける。名を惜み義を重んずる士、ふみ留て是はいかに、某返すぞ、とまれ〳〵と恥しむれ共、引立たる大軍なれば、馬は騷ぎ、人は喚く間、さけべとも聞えず。競ひ懸る敵に追詰られ、藝、防、長の三箇國に名をあらはしたる士多く討れにけり。されども吉川、小早川は、何の恙もなく小倉まで引取、同十七日元就に從つて、長門の地に押渡る。かゝりければ豐前、筑前に、今まで毛利方に屬したる城主地士、少々有けるが、元就にしたがひ、ともに中國に越るも有。又大友方に首をのべて降をこひ、浪々の身と成もあり。されば共坂田、桂浦は、立花の城を堅固

に持抱へてぞ有ける。元龜元年大友宗麟、其身は筑後國高良山にありながら、筑前國立花の城に、去年毛利方より押へ置たる坂田新五左衞門、桂左衞門尉、浦兵部丞を攻よとて、戸次丹後守鑑連、臼杵越中守鑑速、吉弘左近大夫鑑理以下の諸將を、立花邊に差し向らる。其勢二萬餘人、立花の城を取卷関を發し、鐵砲をつるべ立て、隙なくしよりけり。城中の者共は攻口に降り合て、命も惜まず戰ふたり。され共城は無勢にして、しかも後詰の頼なし。寄手は多勢にて殊に味方の國なれば、次第に勢重りける。斯ては城中一日も堪難く見えける所に、戸次、臼杵、吉弘の三將より使を立て、城中へ申されけるは、當城を責落すべき事、掌を指よりやすし。され共大友屋形貴方に對し、何の遺恨なし。城を明渡して、士卒の命を助けらるべきや否と申遣しければ、坂田、桂浦を始、士卒皆、籠鳥涸魚の思ひをなしける折からなれば、一戰したるをしほにして、城をあけてぞ退きけ

る。大友方より懇に人質を出し、其上警固として軍兵を指副(たへ)、長門の地へ送り付ける。是は去年臼杵、田所、鶴原が降參しけるを、豐後へ送り返されし、其報恩とぞ聞えし。斯て宗麟は、豐前筑前の仕置事終り、軍功の淺深によりて恩賞を行はれ、高良山より豐府に歸陣し、高崎の城へ入られける。國々に在所の旗下の士、皆々府内に參候す。天文以來、中國の毛利敵をなし、其外龍造寺、秋月、高橋等の諸將多く亂をなすといへ共、宗麟の武威を以て、今年の春より九國の内靜り、弓を袋に入、太刀を函(はこ)に收む。筑前國立花は大事の城なれば、無才覺の人を指置ては叶ふまじとて、戸次丹後守鑑連は、武勇才智古人を不恥、其器に當りければ、立花の城主に定て、元龜元年豐後國赤司村藤北の鎧が嶽の城より、立花の城に移されける。鑑連は今年五十七歳、後に剃髪して道雪と號す。九州中國において勇名を顯せし人也。天正十年十月九日、御笠郡岩屋の城主高橋紹運の嫡子、左近將

監統虎を、立花道雪所望に依て養子とし、立花に遣さる。紹運より瀬戸口十兵衞太田久作と云士二人供に付、立花に送らる。其外士中間一人も付られず。道雪は久しく統虎養子の望有しかば、薦野三河入道賢賀、先年より紹運へ内通し、其後原尻宮内を使として、言入られしかども、紹運も亂世嫡子を他へ遣す事、いかがと猶豫せられける。然るに天正九年、紹運道雪兩將穗波郡へ打出、十一月六日、秋月が兵と相戰はれしが、此時統虎十餘歳にて初陣せられ、其勇氣甚勝れたりしを、道雪見屆け、いよ〳〵所望頻なりければ、其陣中にて紹運許容せられける。天正十三年九月十一日、道雪筑後國御井郡北野村にて死去せらる。行年七十三とぞ聞えし。去年より大友家の士大將に加勢のため、此所に在陣して、四方の敵と攻合事度々也しが、多年の軍勞に筋力おとろへ、老病におかされ、終に死去せらる。立花の城主左近將監統虎より、十時攝津守を使として、道雪の死骸を立花へ持來るべ

き由告やられける。紹運も立花勢も、筑前に引返すべきに定りける。是を聞て、高良山在陣の豊後勢も、殘らず黒木をさして引入ける。同十四日、紹運並道雪家人北野村を打立ける。道すがら敵地なれば、用心すべしとて、蔦野三河守、十時攝津守、小野和泉等を先陣とし、道雪の死骸を中に立て、紹運は殿せられけり。路次敵領なれ共、肥前には龍造寺隆信、不慮に有馬にて討れ、家中の騒動斜ならず。筑後の國士も彼是敗北せしかば、出合敵もなくして、途中恙なく、紹運は岩屋城に入らる。道雪の死骸立花に着きければ、立花山の下養孝院に葬る。今に彼寺には其墓あり。道雪は其人となり智勇有。若年より弓矢を取て堅きを破り、強きを拉ぎ、向ふ所を靡けずと云事なし。天文の末より天正年中に至る迄、武名を九州に振へり。しかのみならず、忠義ありて大友宗麟の不德をいさめ、終始二心なく服事せり。且士卒をなづけ人の和を得たり。むかし肥後の菊池氏、宮方に無二の忠節をはげ

ましける。菊池亡びて後、近代筑紫においては、小身といへども、紹運、道雪の兩將、智勇忠義共に群にこえたり。天正十四年七月、島津勢岩屋の城を攻破り、城主高橋紹運自害せられしかば、廿八日早旦より寶滿の城に取懸る。兼て有智山在陣の勢を合て、三萬人を二手に分、一手は追手松尾坂より攻め上り、一手は愛嶽(をだけ)より取出を乘破りて、講堂の南の尾崎より競上る。城中へ使を遣し、岩屋落城の上は、寶滿の城早々あけ渡すべきよし云入ける。城中小勢なる上、岩屋落城をまのあたりに見て力をおとし、大軍に向ひ戰ふべきやうもなかりしかば、城主統增を助て、統增は紹運の子也。立花の城に送り屆られ候はゞ、城を明渡すべしと答ければ、島津方より相違あらじと領掌せし故、統增下城す。島津方より約を變じ、統增を虜にして薩摩へ連れ行ける。岩屋落城の所に詳に記す。其後島津方より立花に使を立、岩屋寶滿の兩城既に沒落す。此勢を以て、其城へ取かけ攻落すべし。但統虎において、島

津遺恨なし。只九州を治取べき爲なれば、いそぎ降參有べしと言遣す。依之統虎の家臣立花右衞門太夫鎭實、同勘右衞門、同次郎兵衞、同阿波守、同與三左衞門、同彈正直貞、山布入道雪荷、小野和泉守、十時攝津守、同太郎左衞門、原尻宮内、薦野三河守、安東紀伊守、高野大膳亮、内田、森下、堀、足達等、統虎の前に會合し、評議して曰、紹運の御事はきこゆる名將にて、家中にも勇士多く、身命を捨て防ぐといへ共、寄手大軍なれば落城せり。彼を以て思ふに、當城にもあの大勢攻來らば、いかに良將勇士ありとても、たまるべしとも覺えず。我等は命は惜からねども、統虎御自害あらば、御家斷絶せん事こそ悲しけれ。我等君の御命にかはりても、御家長久の詮議こそあらまほしけれと云。或統虎御自害あらんは是非なけれ共、武士は生死の事に拘らず、大友殿を捨て、いかでか島津に降を乞給ふべきや。既に紹運戰死し給ひて後、島津に降參あらば、命を惜みて忠孝の道

をしらぬ士也と、九國の者に笑はれんは必定也。我等粉骨を盡して防ぎ戰はゞ、廿餘日支へぬことよもあらじ。其内に秀吉公御助勢馳來るべし。後詰の勢を待受なば運を開くべし。若其内落城せば君臣共に運の極と思ふべしと云者も有。彼も一理あれば捨がたし。是れは猶も至極せりと思ひあへる所に、統虎申されけるは、汝等が僉議端多し。勇士は義を先とす。降參の儀思ひもよらず。命惜しと思はん輩は早く落去すべし。少も恨なし。日比の君臣の約を違へじと思はん士は、籠城すべしと有ければ、誰か二代の君恩を忘て落行可申哉とて、一同に金打して誓をなす。統虎より敵方への返答には、我等事、關白殿より御朱印を賜はり、御家人に成て候。殊に紹運事、殿下の爲に岩屋に於いて自殺致し候間、當城にて紹運孝順の爲め、今一戰せしめ、其後相談可申候間、早く軍勢を此地に指向らるべき由申遣ける。さらば籠城の用意せよとて、岸を切立屏櫓を修理し、役所〳〵の

手合して、敵今や寄ると待懸たり。去程に島津勢太宰府を立て、糟屋郡に押出る。敵方も此間岩屋寳滿兩城にて、宗徒の勇士多く討せ、軍兵多く亡、手負も多かりけり。殊に立花は究竟の要害なる上、籠る所の士卒も岩屋より多かるべし。輙く責落し難しとや思ひけん、急には不攻して、遠矢が原に陣屋をかけ、城下を悉く燒拂ひ、裸城(はだか)になし、そこ〻に押へを置、陣取堅めて、時々足輕共を出して、遠ながら鐵砲を打かくるばかりにて、徒に日をぞ送りける。扨秋月種實は、岩屋落城の上は、御笠郡を手に付、寳滿を隱居城に定め、岩屋にも人數を籠置く。糟屋郡高鳥居の城は、大内時代に杉豐後守興行が取立て住み、其後鞍手郡の龍德より、杉重並、同連並かけ持して有しが、近年空城なるを取構へ、立花押へのために、筑後國住人星野中務大輔吉實、同民部少輔をぞ籠置ける。去程に秀吉公の先勢、吉川駿河守元春、小早川左衞門佐隆景、黑田勘解由孝高數萬の大軍を引卒し、

豐前小倉に着船のよし聞えしかば、島津方より早く軍勢を引取べき由いひつかはしける。依之宰府表糟屋郡立花へ寄ける軍兵、凡筑前に充滿たる薩摩勢、八月中旬悉く引退ける。其後統虎、やがて居城を打出で、八月二十五日、高鳥居の城に押寄、即時に攻落し、城主星野中務吉實、舍弟民部吉兼、其外士卒不殘打取、城を破却して引退く。此由隆景孝高より注進せられければ、秀吉公御感斜ならず、立花事、自分の城を持こたへ候さへめづらしき手柄なるに、早く高鳥居の城を乘取、城主兄弟以下打取し事、比類なき働、九州の一物也と、御褒美ある感書を孝高に對し給りける。（此感書黑田家に在けるを、立花家の面目なる文章なれば、かれて所望せられけれ共、黑田家九州の軍奉行として、諸所に下知せられし事、是又家の規模なれば出されず。されど共寛文年中に至り、類に是を乞はれければ、力なく寫をとゞめて、本書をおくりたまふ。）其翌天正十五年の春、秀吉公西征して九國を打隨へ、諸士に賞を行はれける時、立花統虎の武勇を感じ、改て筑後國柳川に封せられ、此國をば隆景に給はる。其上に肥前の内二郡、筑後の内二郡を加

へ領して、入國あり。隆景は名島の城を築きて居住せらる。むかしの事を思ひいでゝ、立花の城には浦兵部宗勝を城代として入置れける。長政公入國の後には取崩さる。立花口村は城有し時の士宅也。大門と云所、立花口村の入口にあり。是大手の門有し所也。下原村の方に中門と云所有。是搦手にや、凡此城は要害無双の名城なりしと也。立花山の南の方、立花山につゞきたる山を鑑種陣と云。其下の谷も戰場也。

○團（だんの）原（はる）

横（よこ）十五町程縱（たて）廿四五町程ある廣野也。昔此所に團右近將監宗時と云地士居住し、宗像郡の内東郷、西郷其外近郷を領しけるが、薦野村に居たりし丹治式部少輔峯延と、同じく修理亮峰時慶合戰す。宗時終に打負て峯延に降る。團氏の居たりし故、其所を團の原と云。團宗時が遠孫、今も立花氏に仕へて其國に在。

○永祿十年九月、宗像氏貞、許斐左馬大夫氏備、大友一味の志を變じ、謀叛を企て軍勢を催す。是は去年

大友の催促に應じて、高橋三河守鑑種を責んとて、太宰府の寄手に加りて有けるが、毛利元就に語らはれ、中國勢渡海せば、居城を明てはいかゞあらん、在所に歸りて防戰の用意すべしと僞て、宗像に歸りけり。斯て宗像許斐は人數を揃へ、同五日立花の城に發向す。此城には大友宗麟より、立花但馬守鑑載、怒留湯長門入道を入置れしが、此由を聞、何樣敵を居ながら待つ事、武略のたらざるに似たりとて、城には守りの兵を置、兩城代多勢を率し、立花山を下り、鑑載は席内の原に陣を張る。怒留湯融泉は庄と云所に陣取て、宗像許斐と對陣す。兩陣初は足輕を出し、鐵砲軍をしけるが、後には入亂て戰ひけるに、宗像終に打負て、東を指て引退く。立花怒留湯が勢勝に乘て追かけたり。敵味方日頃たがひに知られたる中なれば、後の嘲(あざけり)をや恥たりけん、宗像が士占部大和、神屋石松を先として、二百餘人取て返し、競ひ懸る敵を追退け、氏貞が跡より赤馬の城に引入けり。是を

團の原合戰といふ。

○薦野臼嶽古城並小松岡砦

薦野臼嶽古城、今茶臼山と云。此城は薦野氏の祖、丹治式部少輔峯延が築く所也。小松岡は邑城にして、今養德山と云。峯延が法號を養德院了恩と云し故なり。本姓丹治、人王廿九代宣化天皇より出、上殖葉皇子、十市王、多治比王、其名を以て姓として、多治比の姓を給ふ。丹治、丹比、丹墀同じ。裔孫丹墀眞人島左大臣、丹墀廣成中納言、の後也。峯延峯時が後、相繼て爰に住す。故に薦野氏と稱す。

筑前國續風土記卷之二十七終